第2章　高度医療機器の導入強化

しめやかに合同慰霊祭

平成元年2月8日、3号館・学術講堂で病理解剖に協力してもらった方々の解剖体合同慰霊祭がしめやかに行われた。

慰霊祭は3年に1回程度開かれているもので、今回は昭和61年1月から63年11月までに解剖した３４５柱の霊を慰めた。昭和「最後」の慰霊祭になった。遺族ら約２５０人と職員約１００人が参列するなか、時任純孝院長が「現代医学の進歩は目覚ましいものがあるが、ここに祭られた方々こそ、その最大の貢献者だ。今後とも皆様の志を無駄にすることなく、努力を続けたい」と追悼の言葉を述べた。一方、遺族の代表からも「家族の遺体にメスを入れることは辛かったが、それにも増して、あなた方を奪った病への憎しみは大きかった。これからも私たちを見守ってほしい」と亡くなった家族を偲ぶ言葉が述べられた。最後に参列者全員が献花して解剖体の慰霊を行った。慰霊祭はその後も4、5年に1度の割合で挙行されている。

合同慰霊祭

心臓血管撮影装置など導入

平成元年4月、市立病院は、心臓血管撮影装置を導入した。心臓の血管を高速で撮影するもので、心臓の冠動脈の閉塞、血管の狭窄部位、狭窄度などの測定に使用されるとともに、冠動脈の拡張手術などの治療にも使用できる。主に循環器救急診療用として購入し、その後、市内7病院でＣＣＵ（冠疾患集中治療室）ネットワークをつくり、その中核病院の先進医療機器として幅広く活用された。

同3年2月に完成した救命救急センター棟では、特に手術室内の清潔さを保つことに配慮し、患者移送システムを導入した。これは患者の搬送用ストレッチャーを手術室内に持ち込むことなく、患者を安定した状態で手術台へ直接移すことができるシステムだ。また同時に救命救急センターＩＣＵ室に中央監視システムを導入した。これは重症患者、救急患者のみを集めて密度の高い治療を行う施設である、ＩＣＵに設置すべき必要不可欠なシステムである。患者の心電図、心拍数、呼吸、血圧、体温など生命維持に重要な機能を監視する装置で、セントラルモニター2台とベッドサイドモニター6台、不整脈モニター1台などで構成される。同年9月の市議会で、今後の高度医療機器導入予定について問われ、時任純孝院長は「今後は、がん、心臓病、脳血管疾患など死亡原因の上位を占めている疾病の早期確定診断に対応できる機器の整備が必要だろうと考えている」と答えた。

麻酔科の外来診療開始

平成元年6月、市立病院麻酔科の外来診療が始まった。

麻酔科は昭和40年に外科の一部門として設置された。当初は、外科部長の兼任のもと、各科の麻酔をサポートする形で麻酔を行っていた。しかし、59年から麻酔科専門医が常勤医として麻酔を行うようになった。常勤医数は1人だった。同63年に2人に増え、外来診療開始につながった。平成元年7月には、初代の麻酔科単独部長として安達寛部長を迎えた。同4年から常勤医は3人となり、スタッフ体制が充実。同5年、2代目部長として吉嶺孝和部長を迎えた。麻酔科の専門領域としては臨床麻酔と集中治療、ペインクリニックの3分野があり、外来開設当初は、２０００例以上に及ぶ麻酔管理が中心的な業務だった。平成元年度の外来患者数は１９４人、1日平均1人だった。

アフガン難民の医療活動

平成元年8月14日、市立病院産婦人科の鮫島浩医師（32歳）が、パキスタンのペシャワルにあるアフガン産婦人科病院に技術指導するため出発した。9月中旬まで妊産婦のための最新医療機器の取り扱い指導や患者の診察に当たった。

開発途上地域に各分野の日本人技術者や青年海外協力隊を派遣している国際協力事業団（ＪＩＣＡ）

が、同年2月のソ連軍のアフガン撤退を受け、アフガン難民の援助を決めた。医療機器不足で多くの未熟児が満足な手当ても受けられず衰弱、乳児死亡率がかなり高いことが判明。このためパキスタンに設けられた難民救済施設、アフガン産婦人科病院に超音波診断装置、分娩監視装置などの機器を送り、現地の医師に技術指導できる医師派遣を決めた。そこで周産期管理の専門家である鮫島医師が推薦された。ペシャワルはアフガニスタンとの国境の街。鮫島医師は「自分の技術が他国の役に立つならば光栄だ。新しい技術を指導し、機器が有効に生かされるようにしたい」と述べ、外西寿彦副院長・産婦人科部長は「米国留学の経験もあり、語学も堪能なので十分指導できる。我々のスタッフが参加できることは素晴らしい」と期待を寄せた。

スポーツ整形外科始動

平成元年9月、市立病院整形外科（谷口良康部長）はスポーツ選手のけがなどを専門的に治療するスポーツ整形外科の診療を始めた。関東、関西の大学病院などでは10年ほど前から開設されているが、県内では初めて。

谷口部長は「開設の要望が特に多かったというわけではないが、診療に来た人たちを系統的、専門的に治療していこうと考えた。スポーツ選手なら、痛みやけがを抱えながらもスポーツを続けたいという人は多い。そんな選手たちの悩みに少しでもこたえ、自分たちも勉強していければ」と開設の理由を述べた。

毎週土曜日の午前中を外来にあて、有馬三郎医師が中心になって治療を行った。中学、高校の陸上競技、野球の選手らが毎週30人程度訪れた。診察は、痛みに対する治療だけにとどまらず、選手の練習状態やスケジュール調整にも助言するきめ細かさ。病院の取り組みに対して、県体育協会の稲田敏文理事長は「今まで個々が各スポーツドクターに相談していた。公的な場にこのような窓口ができ、本当にありがたい」と歓迎。谷口部長は「今は人手不足で診療に限界があるが、平日の受診などを含め、徐々に窓口を広げていきたい」と話した。

胎児の治療成功を報告

平成2年3月、市立病院周産期センター（外西寿彦所長）の池ノ上克科長らのグループが、国内で初めておしっこの出なくなった胎児の治療に成功、グループの平野隆博医師が小児科学会鹿児島地方部会で報告した。

腎臓で作られた尿は尿管、膀胱（ぼうこう）、尿道を経て体外に排出される。仕組みは胎児でも変わらず、何らかの原因で尿が羊水の中に出なくなると、肺の形成が妨げられると同時に腎不全になり、致命的な障害を起こしかねない。出生にこぎつけたとしても治療に反応しないことが多く、予後は極めて悪い。センターに紹介されてきた妊婦の胎児は、膀胱と腎臓が極端に腫れており、尿道が塞がった下部尿路閉塞と診断された。このため妊娠16週、20週の2回治療。超音波で観察しながらカテーテルを妊婦の腹壁から子宮に入

れ、胎児の膀胱と羊水の間にS字状の「尿道管」を設置した。

治療後は顕著な効果が認められ、妊娠32週目に帝王切開で出産。直ちに鹿児島大学医学部小児外科・秋山洋教授の執刀で応急的な手術をした。平野医師は「発見が早かったことと、妊婦本人と周囲が協力的だったことが成功につながった」と報告。秋山教授は「放置していたら死産、または肺の低形成、腎不全による死亡は免れなかっただろう。胎児治療は米国を中心に盛んに行われているが、日本での成功は珍しい。貴重な症例」と語った。

初の腹腔鏡手術で胆嚢摘出

平成3年2月、市立病院で胆石症の患者に対して、開腹せずに腹腔鏡を利用して胆嚢（のう）を取り出す手術が行われた。鹿児島では初めての腹腔鏡手術だ。直後に鹿児島市医師会病院でも同様の手術が実施された。傷跡が残らない、入院期間が短いなどのメリットが多い。欧米では3年前から実施されるが、日本では前年から取り組みが始まったばかりだった。

手術を受けたのは20代の女性。土持昭男外科部長が執刀した。手術手順は、全身麻酔した患者の腹部に二酸化炭素を注入して膨らませた後、4カ所に1㌢から5㍉ほどの穴を開ける。へその近くの穴から腹腔鏡を差し入れ、もう一つの穴からは術者が処置用の器具を入れ、残りの穴には助手が鉗子（かん）など補助器具を入れる。術者は腹腔鏡の映像をテレビモニターで見ながら、胆嚢を切除し取り出すというものだ。手術の

ビデオや文献などで綿密に準備を重ねた土持外科部長は「従来の開腹手術だと患者に対する負担が大きいが、この方法だと負担軽減のほか回復も早い。今度の患者も翌日から食事ができ、トイレにも行けた。術後の痛みもほとんどない。開腹した場合、退院するまで3週間ほどかかるが、1週間足らずで済む。必然的に費用も安くなる。20㌢ほど切る開腹手術と比べたら傷跡も目立たない」とメリットを指摘した。

ボランティア「木曜会」始動

平成3年4月、県内病院では初めてとなる病院内のボランティアグループ「木曜会」が、病院職員では行き届かない分野の支援サービスを始めた。

「木曜会」（桜井正代代表、21人）は、平成元年に市教育委員会主催の「婦人指導者研修（初級・中級）」「ボランティア講座」を受講し、卒業した主婦らで結成した。その後独自に障害者や高齢者の集まり、甲突川清掃などで活動を続けていたが、市立病院でボランティアが必要なことを知り、「木曜会」として全員で参加を決めた。来院は日・祝日を除く毎日。2、3人ずつでチームを組む。活動は午前中2時間ほど。作業のメインは中央材料室での手術用ガウン、マスク、帽子、下着、ガーゼなどの整理。洗濯したものを一枚一枚丁寧にたたみ、次の手術に備える。

木曜会　毎日五、六人がつめる病院三階のリネン室は、地味な作業をてきぱきこなす女性たちの明るい笑い声が響く

病院では手術の回数が増え、看護師の人手不足もあって、負担が増えていた。中央手術室の玉利ハルミ看護師長は「これまで手術着の整理も看護師が中心になり行っていた。おかげで本来の看護師業務に専念できる。本当にありがたい」と感謝。ボランティアは病棟にも広がり、車いす利用の患者をリハビリ室に案内するほか、小児病棟では子どもと一緒にちぎり絵作りをするなどの活動も行った。会員の参加動機は「家族が入院してお世話になり、そのお礼に」「手に障害があり、リハビリを兼ねて少しでも人のお役に」とさまざま。桜井代表は「市の主催で講座を受けたが、学んだことを発揮できる場を求めていた。無償の行為だが、全く苦にならない。むしろ、お役に立ててうれしいし、ぼけ防止にもなります。もっと活動を充実したい」と語った。

MRIを導入

平成4年3月、市立病院は脳の血管撮影に効果的な最新のMRI（磁気共鳴診断装置）を導入した。同種のMRI導入は県内で3病院目。

MRIはCTスキャンと異なり、磁力を使って脳内部を縦、横自在に撮影し、画像が鮮明なのが特長だ。特にくも膜下出血の原因となる脳動脈瘤の発見などに威力を発揮する。X線による脳血管撮影では、造影剤を注入するため患者は痛みを伴っていたが、MRIは痛みや放射線被ばくがない。ただ、撮影には30～40分程度かかる。導入したMRIは日本製で救命救急センター地下1階に設置した。総事業費は約4

億５０００万円。脳神経外科が専門の時任純孝院長は「ＭＲＩは長年の念願だった。診療が一段と充実するだろう」と導入の意義を語った。

時任純孝院長が勇退、外西寿彦院長が就任

平成４年３月、市立病院の時任純孝院長が体調を崩していることを理由に勇退を表明、３月限りで辞職した。任期は５年３月までだったが、血圧が高めになるなど体調が思わしくなく、３月市議会も数日間欠席していた。後任に県医師会常任理事で前市立病院副院長の外西寿彦氏が決まった。

時任院長は姶良郡栗野町出身。七高、熊本医科大卒で昭和42年、新設された脳神経外科部長として熊本大学医学部から赴任した。副院長などを経て、60年４月から院長。赴任当時、鹿児島では一般的でなかった脳外科手術を積極的に取り入れ、救命に尽力したほか、数の少なかった脳外科専門医の養成にも力を入れた。また平成３年３月オープンした新救命救急センターの設置など24時間体制の救急医療充実にも積極的に取り組んだ。

勇退時の新聞インタビューで時任院長は、25年間の思い出と一番印象に残ったことについて「本当にあっという間でした。死ぬほど忙しい時もあったが、一番充実した時期だったのではないか。印象に残っているのは、自分自身が３回も倒れてしまったこと。自分は、病気はしないと思っていたが、元気になると無理してしまう。患者を診るのが楽しかったし、好きな焼酎もよく飲んだから」と語った。

遠隔地の胎児、画像で診断

平成4年4月、市立病院は、遠隔地の病院などと電話回線を利用して胎児や胎盤の異常を的確に診断するための「超音波画像伝送システム」を開発、実用化した。周産期医療の分野では日本で初めてのシステム。離島など抱える鹿児島県では威力が期待された。

胎児や胎盤異常の診断は難しく、緊急を要するケースが多いことから、これまで第一次病院と救急病院との間で様々な検討が進められてきた。特に異常診断には胎児心拍モニタリングと超音波の画像診断が大きな決め手になる。これまで胎児心拍モニタリングはファクスで送ることができた。しかし、超音波画像はファクスで送っても、肝心の画像が不鮮明で診断情報としては精度に欠けていた。開発したシステムは、NTTの静止画像送受信機を活用。従来のものより鮮明な画像の送受信ができるように開発され、鹿屋市の産婦人科病院と実験を続けていた。鮮明な送受信が可能になったことから実用化となった。

同システムは、一次病院の医師が妊婦の胎児を超音波で映しながら、普通の電話回線を通して伝送装置で市立病院へ送る。病院では専門医が待機し、電話で応対しながら送り手の医師と検討、診断する。同時に複数の医師が妊婦や胎児の状況を評価することで、より確度の高い診断ができるようになった。開発にあたった産婦人科の松田義雄医長は「周産期医療や母子救急医療は、送る側と受け入れ側との連携が大切。その点、今回のシステムで迅速かつ正確な情報交換が可能になった」と話した。

3度目のベストエッセイ賞

平成4年7月、市立病院の武弘道副院長の書いたエッセイが、平成4年版の日本エッセイスト・クラブ編ベストエッセイ賞に選ばれた。武副院長は、これまで平成元年、同2年に連続して選ばれており、今回が3度目の受賞。4年版エッセイ集「明治のベースボール」に掲載された。同賞は1回受賞すると、さらに選考基準が厳しくなることから「3回目の受賞は珍しい」（文芸春秋）と高く評価された。

武副院長の受賞作「インドでインド国歌を歌う」と題するエッセイは、鹿児島の雑誌「随筆かごしま」に寄稿した。大学時代に覚えたインド国歌を、いつかインドの人々の前で歌おうという夢を持ち続け、30年ぶりに実現した喜びをまとめた。同賞は、全国から一般公募したものと、定期刊行物に載った作品の中から選ばれる。平成4年版はプロの随筆家や作家のものも含め、約4000点が対象となり、61編が選ばれた。その中には、評論家扇谷正造さん、漫画家岩本久則さん、作家田辺聖子さんらもいた。

平成元年の初受賞作品「五つ子の話」は、鹿児島の2組の五つ子の体験をもとに、内外の五つ子の例を引用しながら今後の無事な発育を願う温かい内容。2度目の受賞作品「大通り公園の詰め将棋」は、札幌医科大学でインターンとして勤務を始めたころ、大通り公園の街頭詰め将棋屋にだまされたことが縁で知り合った人との28年ぶりの再会をまとめた感動的なエピソードだ。

毎日100人近い子どもたちの診療や全国小児科専門医試験委員、厚生省の成人T細胞白血病（ATL）母子感染委託研究など多忙な合間に書いた作品の受賞。武副院長は「初回は素材が良かったから選ば

れたと周りから言われた。2回目はもう一度挑戦してみようと思った。今回は、まさか3度も選ばれるとは思ってもみなかった」と喜んだ。

上高原第3代院長が死去

市立病院の第3代院長の上高原勝美さんが平成4年8月15日、肺炎のため死去した。享年80歳。指宿市十二町出身。七高から九州帝国大学医学部を卒業し、昭和17年から鹿児島市立診療所（市立病院の前身）に勤務。昭和36年から60年に退職するまでの24年間にわたり院長を務めた。昭和44年からは初代病院事業管理者を兼務し、病院整備事業、24時間体制の脳疾患救急センター、周産期医療センターなど病院機能の整備・充実に尽力した。

専門は外科で、結核全盛時代は肺切除の名医として知られた。勲三等瑞宝章、厚生大臣表彰、県民表彰、南日本文化賞などを受けた。

胃がんとウイルスの関連発表

平成4年10月、市立病院・病理研究検査室の徳永正義室長ら鹿児島と札幌の共同研究グループが、胃がんの約10％は、がんウイルスの一種、EBウイルスが細胞に感染して発病に絡んでいることを突き止め、

30日神戸で開かれた日本ウイルス学会で発表した。

発表したのは、徳永室長のほか、鹿児島大学医学部の佐藤栄一教授、北海道大学医学部がん研究施設の大里外誉郎教授らのグループ。ＥＢウイルスは、子どものあごのがんなど口の周辺に発生する特殊ながんの原因として知られるが、日本人で最も多い胃がんとの関連が示されたのは初めてだ。ＥＢウイルスは１歳までにほとんどの人に感染し、一生ついてまわるごくありふれたウイルス。ふだんはほとんど影響しないが、免疫力が弱ったりすると、様々な病気を起こす。研究グループは、市立病院など全国５病院で昭和51年から平成４年までに切除した約１５００症例の胃がんの組織を詳しく病理検査した。その結果、約10％の胃がんの組織にＥＢウイルスが見つかった。感染細胞はがん組織だけに限られていた。同ウイルスが見つかるのは胃の入り口に近いほど多く、発生率は男性が女性より3倍高かった。免疫反応を担うリンパ球が、がん組織に集まっている胃がんでは、ＥＢウイルスのがん遺伝子が25％も検出された。

これらのデータから研究グループは、胃がんの10％前後に同ウイルスの細胞感染が発生原因として関与していると結論付けた。徳永室長は「広範な研究で証明したのは世界で初めて。全国の症例を診たが、感染の割合に地域差はなかった。発がんにはＥＢウイルスだけでなく他の因子も絡んでいると思う。今回の研究で免疫・化学療法に活路が開かれる可能性もある」と話した。

独立採算制で初赤字

平成４年11月、市立病院の３年度収支決算が、財政上、独立採算制となった昭和39年度以降初めて赤字になったことが市議会・経済企業委員会で明らかにされた。赤字額は税抜きで１億１２５１万５０４６円。赤字補てんには前年度からの繰越利益剰余金を充てた。

市立病院は昭和39年度から平成２年度までの決算では、いずれも６５０万円～６億５０００万円の黒字。しかし、実際の医療行為による医業収支は昭和63年度から赤字になっており、その分は駐車場収益などで補ってきた。医業収益の赤字は人事院勧告による人件費のアップ率と、国の定める医療費改定の上げ幅が釣り合わず、さらに市内の医療機関整備も進んだ結果、患者数が横ばいだったことなどが原因とされた。

経済企業委員会では、赤字の理由として、①救命救急センターの増設工事で利用できない病室が出た②同センター開設で、臨時募集した看護師が定員に達せず、不足した人数を一般病棟の看護師で補ったため、ベッド稼働率を落とした―とも説明された。

体外衝撃波結石破砕装置を導入

平成5年3月、市立病院は、体外で発生させた衝撃波を体内の結石に集中照射して、他の組織を傷つけずに腎・尿路結石、胆石を破砕する「体外衝撃波結石破砕装置」を導入した。

衝撃波で小さく砕かれた結石片は、尿や胆汁の流れとともに自然排石を促し、胆石は溶解剤との相乗効果により、体外排出を促すもので、措置時間は30分から1時間と短時間で済む。通常1、2週間ほどの入院が必要だが、石が小さければ外来でも可能。導入は鹿児島大学病院と同時期で、結石の患者にとって福音となった。

4本の指を再接着

平成5年5月、草切りカッターで右手の指4本を切断した種子島の男子小学生が、地元病院と海上自衛隊鹿屋基地の迅速な連携で市立病院に運ばれ、再接着手術に成功した。指の切断事故で4本の指を一度に接合できたのは市立病院では初めてだった。

西之表市の小学4年生男児は、5月23日午後5時過ぎ、牛小屋で牛の餌の牧草を電動カッターで切ろうとして、親指以外の4本を切断。近くの病院に運ばれた。同病院は、市立病院に緊急連絡するとともに鹿屋基地のヘリコプター派遣を要請。さらに切断した指を生理食塩水で浸したガーゼに包んで、ビニール袋

に入れ、アイスボックスに保存した。午後7時過ぎから市立病院形成外科の佐々木健司部長らが手術。骨の中にワイヤーを通し、伸筋腱（けん）と屈筋腱をつないだ後、顕微鏡下で静脈7本、動脈4本をつないだ。手術終了は翌朝7時だった。男児は2、3カ月後に神経縫合手術をすることになったが、経過は順調。佐々木部長は「事故が起きた後の処置が適切で、切断後わずか2時間ほどで手術が開始できたのが良かった。最終的に70％の機能が回復できる」と話した。

森副院長に日本医師会最高優功賞

平成5年10月、市立病院の元小児科部長の森重孝さん（81歳）に、5年度日本医師会最高優功賞の授与が決まった。新聞インタビューで「長年お世話になった市立病院にまず感謝します」と語った。

森さんは川辺郡知覧町生まれ。七高から長崎医大卒。昭和28年、市立病院小児科部長として着任、51年に退任するまでの間に副院長、市立乳児院長など務めた。この間、郷土の医学史に興味を持ち、『薩摩医人群像』『鹿児島医学史散歩』『薩摩の西洋医学』『鹿児島の医学』など多数の著書を出した。昭和58年1月に刊行された『鹿児島市立病院史』も執筆に加わった。こうした医学史研究の功績が認められ、今回の表彰となった。11月1日、日本医師会設立記念医学会で表彰された。

大仁田厚さん退院

平成5年3月25日、市立病院に入院していた人気プロレスラーの大仁田厚さん（35歳）が退院、記者会見で病院スタッフや鹿児島のファンに感謝した。

大仁田さんは2月16日、市内であった試合後にダウン。そのまま市立病院に緊急入院して扁桃周囲膿瘍と診断された。その後、急性呼吸不全などを併発して21日から8日間、麻酔による睡眠状態に入り、一時は病状が悪化して気管切開手術を行うなど危篤状態に陥ったが、医師団の懸命の治療で回復に向かった。主治医を務めた鹿島直子医師は「40度の熱があるのに試合に出ると言うから、あなた、死んじゃうわよと怒った。その後は模範的な患者になった」と述懐。大仁田さんは「ぎりぎりで命が助かった」と言い、約1カ月の入院中、差し入れや激励の手紙を届けたファンにも「人情味があり、ありがたかった」と感謝した。